

## 水谷謙治先生記念号によせて

水谷謙治先生は1961年に本学経済学研究科（経済学専攻）修士課程を修了され、同博士課程在籍中の1962年4月に本学助手となりました。以来専任講師、助教授、教授を経て、本年3月に定年退職されるまで、38年間の長きにわたり教育研究活動を通じて本学並びに経済学部の発展に大いに寄与されました。先生は「再生産論」および「経済原論」の講義、さらにゼミナールを担当されて多数の学生の教育に当たられる一方、大学院での指導を通して研究者養成に多大な貢献を果たされ、多くの卒業生が、現在それぞれの専門分野で活躍しております。

先生の研究分野は経済全般にわたっておりますが、その中でも、以下の3点において特筆すべき業績があります。その一つは、労働疎外論についての研究です。この研究は先生の著書『労働疎外とマルクス経済学』に集約されていますが、そこで先生はマルクスの『経済学・哲学草稿』を中心とした初期の諸論文、そして『資本論』とその諸草稿等を詳細に研究され、マルクスの初期の疎外把握が後の『資本論』までどのように発展させられているかを明らかにされました。

先生の研究業績の特筆すべき第二点は、「再生産論」に関する諸研究です。「再生産論」を巡っては、19世紀から深刻な論争が繰り返され、それ故にまた、論点も多岐にわたり、複雑に絡みあっています。その問題に関する先生の研究成果は『再生産論』に集約されています。そこで先生は、従来の諸見解に対して、「再生産論」を構成する基本的カテゴリーの厳密な規定を対置することによって、それらを批判的に検討され、また錯綜した諸論点をそれぞれに位置づけることに成功されました。これは、解明すべき問題を明確化し、その問題によって規定される方法的視点を確立することによってもたらされたものであり、先生の約20年間にわたる「再生産論」形成史研究に裏付けられたものです。先生の形成史研究は、それまでの「再生産論」形成史の定説を理論的、考証的にくつがえし、以後、先生の見解が定説となっています。

先生の研究における第三の業績は1990年代の「サービス経済」の理論と現状分析に関する研究です。近年の産業構造の変化を受けて、労働価値説の「有効性を問う」見解が続出するなかで、先生はなによりもまず、サービス業をどう規定するかを問題とし、この点に関するマルクスの把握を当時と現代との経済的变化をふまえて検討し；さらに、人材派遣業とリース・レンタル業に焦点を絞った現状分析を行っています。この研究は、価値法則が現代資本主義経済においてどのように貫徹しているかというもっとも困難な問題に、それまでの先生の研究を踏まえて果敢に挑戦された意欲的業績であり、現在進行している「サービス論」論争に大いなる刺激を与えております。

以上のような先生の研究とその業績は、経済学界のみならず、本学および本学部の学問的声

価を高める上で多大の貢献をなすものであったといえます。

立教大学は先生の学術上、教育上の功績の顕著なことにより、2000年7月、先生に名誉教授の称号を贈りました。経済学部は、先生の長年にわたる研究上のご活躍と本学部への貢献を記念して本号を水谷謙治教授記念号といたします。先生のいっそうのご活躍とご健康を祈念いたします。

2000年10月

経済学部長 北川和彦